

涌元古銭と北海道の永楽通宝

函館工業高等専門学校
埋蔵文化財研究会

第48回全道高等学校郷土研究発表大会

2013年11月21日(木)

北広島市芸術文化ホール

1. 発表内容

- ・永楽通宝の成分分析からわかること
- ・北海道の古銭はどこからくるのか

2. 永楽通宝の成分分析からわかること

(1) 成分分析

昨年の発表では、永楽通宝の成分分析の結果から制銭か鑿銭かを判断できることを報告した。今年、知内町涌元地区から出土した永楽通宝を含む明銭以外の古銭である北宋銭の成分分析を行い、昨年の永楽通宝の結果と比較する。

・永楽通宝とは

明の永楽帝の時代に鑄造された古銭で、初鑄年（初めて鑄造された年）は1408年である。中国銭だが、中国ではほとんど流通せず、主に日本で流通した。その理由は分かっていない。この永楽通宝の古銭に刻まれている文字は日本から中国に行った僧侶が書いたという伝説もあり、日本と関係が深い古銭だったとも言われている。しかし、あくまで伝説であり、確かな情報ではない。

・北宋銭

中国の宋王朝の古い時代である北宋の時代（960～1127年）に鑄造された古銭のことである。景德元宝（1004年）、天聖元宝（1023年）、皇宋通宝（1038年）、至和元宝（1054年）、熙寧元宝（1068年）、元豊通宝（1078年）など多くの種類がある。

今回私達が成分分析を行った涌本古銭は、北宋銭を中心に29種類だった。

表1 今回測定した古銭の銭種一覧

唐銭	開元通宝	22		熙寧元宝	27
北宋銭	太平通宝	1		元豊通宝	36
	淳化元宝	2		元祐通宝	20
	至道元宝	4		紹聖元宝	5
	咸平元宝	3		元符通宝	2
	景德元宝	5		聖宋元宝	6
	祥符元宝	8		大觀通宝	3
	祥符通宝	2		政和通宝	7
	天禧通宝	5	南宋銭	嘉定通宝	1
	天聖元宝	12		咸淳元宝	2
	景祐元宝	9	明銭	洪武通宝	6
	皇宋通宝	36		永楽通宝	205
	至和元宝	2		宣徳通宝	1
	至和通宝	2	越南銭	天福鎮宝	1
	嘉祐通宝	5		開泰元宝	1
	治平元宝	3			
	治平通宝	1		合計	445

(2) 制銭と鑿銭について

制銭とは、政府の命令によって正式に作られた古銭のことである。制銭は高い技術で作られているので、刻まれている文字や、古銭の輪郭がはっきりしていることが特徴である。また、政府によって作られた古銭のため、原材料が決まっている。

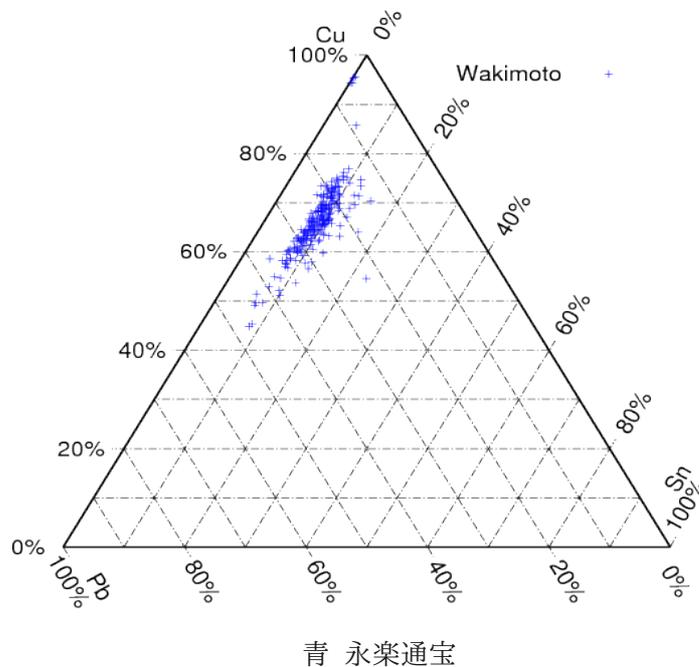
鑿銭とは、私鑄銭とも呼ばれ、一般の人が勝手に作った古銭のことである。制銭とは対照的に、文字が潰れていたり、輪郭がズレていたりという特徴がある。また、一般の人が勝手に作った古銭のため、安い材料で作られている。

従来、この制銭と鑿銭を見分ける方法は、古銭の見た目だけで判断するしかなかった。しかし、私達は材料の条件の違いに着目して、金属成分を測定すれば、制銭と鑿銭の判断が出来るのではないかと考えた。

(3) 永楽通宝の成分分析

金属成分の分析結果を三角ダイアグラムに記す。三角ダイアグラムとは、三つの成分を一つのグラフ上で見ることが出来るグラフである。

図1 涌元から出土した永楽通宝のグラフ



このグラフは、涌元から出土した永楽通宝の成分分析の結果をプロットしたものである。

このグラフから分かることは、まず、永楽通宝というのはだいたい銅60～75%、鉛20～30%、スズ8～10%の間に集中していることが分かる。他にも、集団から離れた、純銅に近い古銭や鉛やスズが多い古銭などがあることがわかる。

この集団から離れた古銭は、従来の見た目による判断でも、鑿銭であると判断された古銭と一致した。このことから、成分分析によって鑿銭だと思われた古銭は予想した通り鑿銭であると確認できた。

しかし、この段階では永楽通宝の測定しか終了しておらず、本当にこのプロットが集中している部分が制銭であるとは断言することができなかった。

そこで私達は、この永楽通宝と同じく涌元から出土した北宋銭も成分分析を行い、その結果を比較してみることにした。

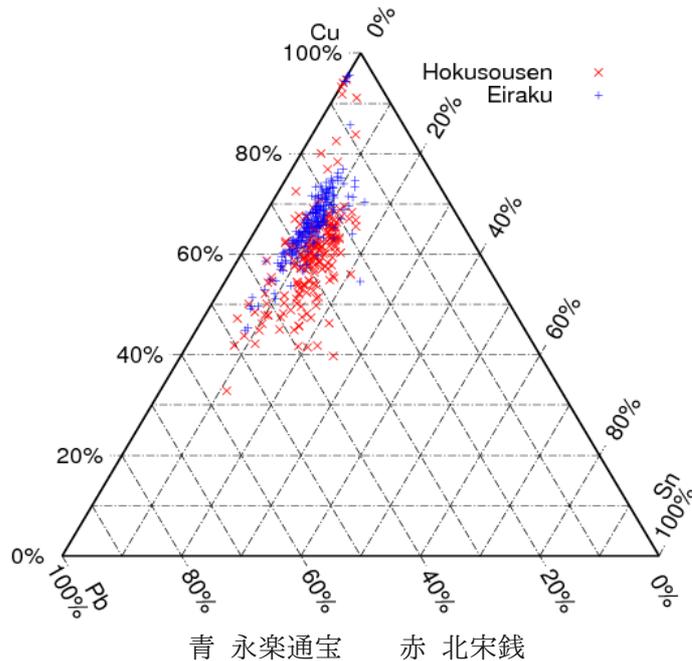
(4) 北宋銭の成分分析との比較

『中国銭幣大辞典』（注1）に鑄造する際の成分がいくつか記されている古銭があり、1105年に銅60%、鉛30%、スズ10%で鑄造したという記録がある。これは何という古銭かは記されていないが、年代から推測するに、崇寧元宝である。また、976～984年にかけて銅62%、鉛26%、スズ12%で鑄造されたという記録も発見することができた。この古銭は太平通宝ではないかと推測できる。

この成分の記録が残っている古銭はどちらも北宋銭であり、永楽通宝の成分ははっきりと分かっていない。しかし、この本に記されている成分を見るかぎり、多少の変化はあるが、極端に金属成分が異なる古銭が鑄造されることは考えにくい。

以上のことより、永楽通宝も同じような成分で鑄造されたと推測することができる。

図2 涌元から出土した永楽通宝と北宋銭のグラフ



このグラフは、涌元古銭の中の永楽通宝と北宋銭の測定結果を示したグラフである。なお、涌元古銭は998枚出土しており、そのうち成分分析が終わっているのは445枚である。このグラフにプロットされているのは、測定が終わっている古銭のみである。

先に述べた通り、およそ銅60%、鉛30%、スズ10%の周辺にある古銭は制銭であるといえることから、永楽通宝のプロットが集中している部分が制銭であるとの仮説が正しいと考えられる。

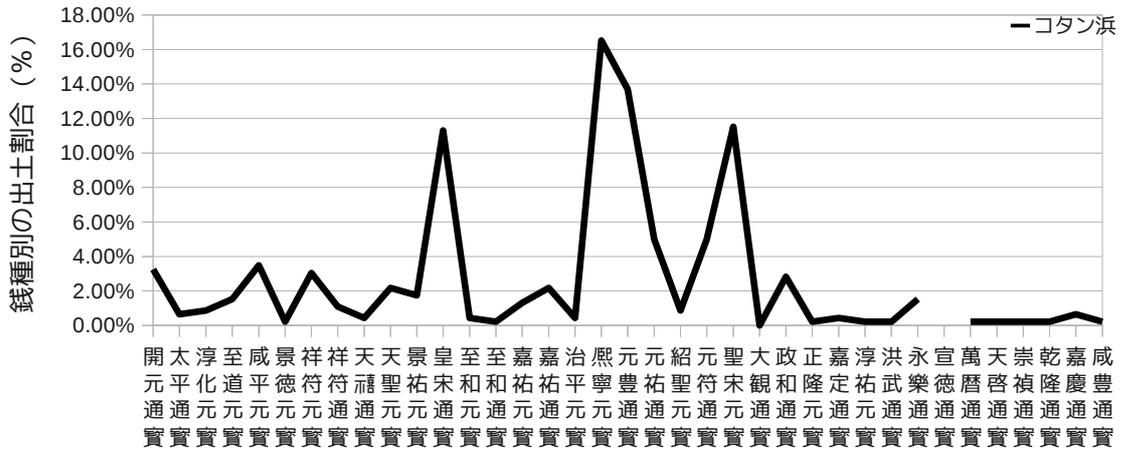
また、永楽通宝に比べ、北宋銭はプロットが散らばっていることがわかる。これは、永楽通宝に比べ、北宋銭の金属成分は定まっていないことを示している。

(5) まとめ

永楽通宝を成分分析しただけでは、本当に成分分析が制銭と鑿銭の判断に有効であるとは断言できなかったが、他の古銭と比べることや、資料を読み解くことによって以前より断然確実なものになった。また、やはり永楽通宝は他の古銭に比べてもプロットが固まっていることから、制銭が多い古銭だということができる。

(3) コタン浜古銭

グラフ4 コタン浜古銭の銭種組成



年代順の銭種

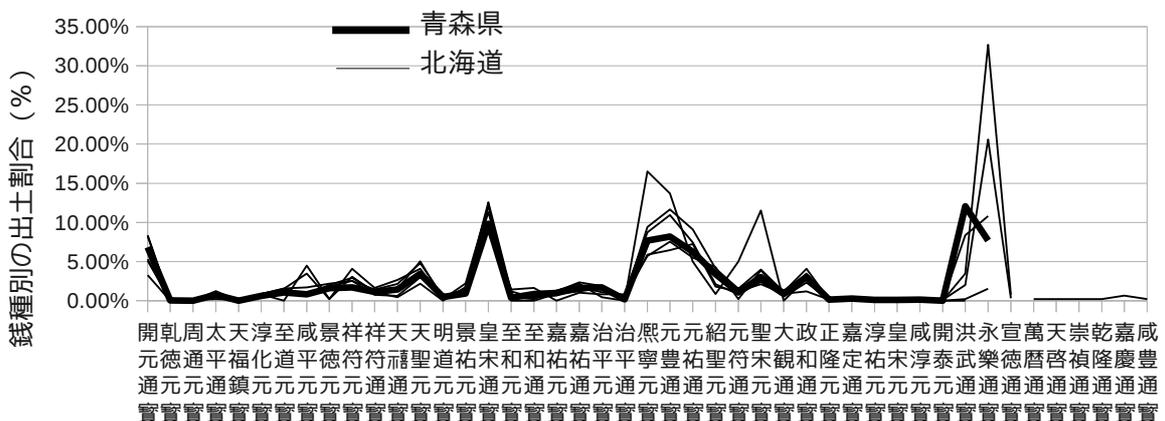
コタン浜古銭のグラフには注目すべきところが2ヶ所あり、1つは宣徳通宝より後に作られた古銭が数枚出土していること。もう1つが聖宋元寶の割合が他の地域と比べても飛び抜けて高いことである。宣徳通宝より後の銭種は明銭・清銭で、北海道では流通していなかったことが分かっている。ではなぜコタン浜では出土していたのか。サハリンから出土した古銭を見てみると、北宋銭8%、金銭2%、明銭2%、清銭88%となっている（注2）。これらより、コタン浜で出土した明銭・清銭はサハリンとの北方交易ではいつてきたものであることが考えられる。また枚数も少ないことから、通貨として流通していた訳ではなく装飾品としてはいつてきたことも推察できる。

聖宋元寶の割合が高いことに関しては未だ専門家の間でも答えが出ていない。ある地域では、特定の銭種をお墓と一緒に埋めていたことが分かっている。あるいは、コタン浜でも何らかの理由でお墓に入れるのに聖宋元寶が好まれたとも考えられる。

(4) 全体

a. 全体のグラフを、北海道のグラフと青森県のグラフの2つに分けて比較してみる。

グラフ5 北海道と青森県の古銭の銭種組成



年代順の銭種

2つのグラフの形が似ている事が分かる。前述したように、鉄砲台と洲崎館には主人と家臣の関係があり、主人の鉄砲台を通してお金を得ていたことが分かっている。これより、洲崎館を含む北海道の古銭は鉄砲台などの本州を通して渡ってきたことが考えられる。

b. 各地域の永楽通宝と宣徳通宝の比率から、各地域の古銭の埋められた順番を推定する。

志海苔古銭 ……志海苔古銭だけ永楽通宝の手前の洪武通宝でグラフが途絶えている。

→永楽通宝は流通しておらず、洪武通宝が作られて北海道に入ってきてすぐに埋められたことが分かる。永楽通宝が出土していないのが志海苔古銭だけなので、この古銭が6つの地域の中で最初に埋められたことが分かる。

コタン浜古銭 ……永楽通宝がわずかに出土してグラフが途絶えている。

途絶えた後、再び万暦通宝からグラフが始まっているがその量は少ない。
→永楽通宝が作られて少し出回ってから埋められたことが分かる。また万暦通宝以降の銭貨は、前述した通り北方から後になって入ってきたものと思われる。

鉄砲台古銭・洲崎館古銭 ……永楽通宝の割合がコタン浜より多いが宣徳通宝は出土していない。

→永楽通宝が多くはないがある程度は出回っていたことが推測される。コタン浜の次に永楽通宝の比率が多いことより、コタン浜の次に埋められたことが分かる。

涌元古銭・賀張古銭 ……永楽通宝の割合が一番高く、この2つが6つの地域の中で唯一宣徳通宝が出土している。

→永楽通宝が出回りきったあと、宣徳通宝が作られて入ってきたときにこの2つの古銭が埋められたことが推察できる。

(5) まとめ

以上の考察から、6つの古銭の埋められた順番は

志海苔古銭 → コタン浜古銭 → 鉄砲台古銭・洲崎館古銭 → 涌元古銭・賀張古銭

の順であると考察できる。

注

- (1) 《中国銭幣大辞典》編纂委員会編『中国銭幣大辞典』宋遼西夏金編・北宋巻、中華書局、2005年。
- (2) I.A.サマーリン「サハリン州オハ地区出土の中国古銭コレクション」『出土銭貨第』33号、2014年（予定）。

謝辞

古銭や資料をご提供くださいました知内町郷土資料館様、日高町立門別図書館郷土資料館様にお礼申し上げます。また、エネルギー分散型蛍光X線分析装置の使用についてご指導くださいました函館工業高等専門学校小林淳哉先生にお礼申し上げます。